

日本シェリー研究センター第27回大会

日時：平成30(2018)年12月1日(土) 12:40 受付

場所：立命館大学 衣笠キャンパス 学而館 GJ301 (アクセスについては別紙を参照)

——プロメテウス・カルトと『フランケンシュタイン』——

『フランケンシュタイン あるいは現代のプロメテウス』出版二百周年記念

特別プログラム

1. 13:00 開会の辞 会長 阿部 美春
2. 13:05 特別講演 クリストフ・ボード

Germany in *Frankenstein*

3. 14:20 シンポジウム

プロメテウス・カルトと『フランケンシュタイン』

司会・レスポンス アルヴィ 宮本 なほ子

パネリスト I 廣野 由美子

「現代のプロメテウス」とは何か?——『フランケンシュタイン』再読

パネリスト II 阿部 美春

苦悩するプロメテウスの後裔——ロマン派女性詩人のプロメテウス

4. 16:30 年次総会 会長選挙・昨年度分会計報告・その他

17:30 より末川記念会館にて懇親会(会費6,000円)を開きます。是非ご参加ください。

事務局からのご連絡

*今年度分(2018年度)の会費未納の方は受付にてお支払いください。

*会場使用料の一部負担金として、参加者お一人500円を頂戴いたします。

特別講演

Germany in *Frankenstein*

Prof. em. Dr. Christoph Bode (Ludwig-Maximilians-Universität München)

In my lecture, I will explore the various ways in which Mary Shelley's novel *Frankenstein; Or, the Modern Prometheus* (1818) is related to Germany. Basically, these ways appear in two forms: intrinsically (that is, when Germany is referenced within the story-world of *Frankenstein*) or extrinsically (that is, when something German plays a role in the motivation for writing or in the conception of writing *Frankenstein*). Sometimes, however, these two kinds of relatedness overlap or interfere with each other in an intriguing way. The overarching question of my talk will be, I guess, how much of the terror of *Frankenstein* is "not of Germany, but of the soul" (E.A. Poe).

In my first part, I will discuss the significance of the fact that Victor Frankenstein is sent to the University of Ingolstadt (coincidentally, modern-day Ludwig-Maximilians-Universität, or LMU, Munich). Why Ingolstadt, of all places? What was it famous (or infamous) for? Due attention will be paid to the founding of the secret order of the Illuminati, at the University of Ingolstadt, by Adam Weishaupt and to the roles played by Adolph Freiherr von Knigge, and, yes, Johann Joachim Christoph Bode (who recruited, among others, Goethe and Herder for the Illuminati). (*En passant*, interesting parallels will be pointed out between Weishaupt and Mary Shelley's father, William Godwin.) I will also mention Johann Wilhelm Ritter, somebody Percy Bysshe Shelley may well have had in mind when he, in his anonymous Preface to the 1818 edition of *Frankenstein*, refers to "the physiological writers of Germany".

Next, I will address the matter of the German family name of 'Frankenstein', most unlikely for "one of the most distinguished" families of the French-speaking republic of Geneva. Could it be that that name is somehow related, as some argue, to Castle Frankenstein, near Darmstadt, which, some say, Mary sailed by or even visited in 1814? This wild theory will be exposed as what it is – fake news.

The central part of my lecture will be about *Fantasmagoriana* (1812), a collection of German ghost stories, translated into French by Jean-Baptiste Benoît Eyriès. According to Mary Shelley's recollection, it was the reading of these ghost stories in the Villa Diodati in the summer of 1816 that triggered, first, the playful ghost story writing contest and, thereby, the idea and the actual writing of the very first version of what was later to develop into a fully-fledged novel, *Frankenstein*. I will explain the relationship between *Fantasmagoriana* and its main source, the German *Gespenserbuch* (in five volumes, 1811-1815), say something about the intellectual environment from which the *Gespenserbuch* sprang (August Apel, Friedrich August Schulze, Caspar David Friedrich, Ludwig Tieck, Carl Gustav Carus, Heinrich von Kleist), weigh into the controversy between James Rieger and John Clubbe about how reliable Mary Shelley's memory of 1831 is and try and assess how much 'Germany' there is in the plot or intellectual substance of *Frankenstein*.

This will lead me to an aspect which, I'm afraid, has been largely neglected so far in the discussion of the German sources of *Frankenstein*, namely their extraordinary highlighting of narrative form through an array of first-person perspectives, arranged in meta- and meta-meta-narratives (or, in another terminology, frame story and inlaid stories of varying degrees), with a concomitant questioning of both reality and the media in which reality is depicted. In this connection, I will comment not only on some of the *Gespensergeschichten* (stories of ghosts, revenants, and necromancers) but also upon Friedrich Schiller's *Der Geisterseher* and, tangentially, on the relevance of the Creature's *éducation sentimentale* through the reading of Goethe's epistolary novel *Werther* (no ghost story, of course, but then *Frankenstein* isn't either, right? Neither is there, significantly, anything of the supernatural in it.).

In the grand finale, the sceneries of two key scenes of the novel – the encounter between Frankenstein and his Creature at the *Mer de glace* at the foot of Mont Blanc and their respective ends in the Arctic Sea – will be read as exemplifications of the Kantian sublime: it is against that backdrop that the pertinent question of *Frankenstein* – What is man? What makes a human being? What is our destination? Are we *allowed* to do whatever we *can* do? – are asked, and not accidentally so. It is, according to Kant, the inconceivably large or hostile non-human in Nature that throws us back upon ourselves and makes us shudder with "respect for our own vocation". It is here that the philosophical message and the form of the novel coincide: there is no auctorially higher plane from which these questions could be answered authoritatively, only different perspectives that are ontologically all on the same level. As readers, we are existentially thrown back upon ourselves, "above us only sky". The terror of *Frankenstein* originates from the insight that what makes us human is not a certain composition of body parts, but essentially social relations – company, empathy, sympathy, affection, love – and that lack thereof ultimately turns us into monsters. In the last instance, to be a human being is not only a biological category, but more pertinently a social one. The terror also stems from the insight that to neglect Beauty in your creations – seen by some as something merely superadded, superfluous, and therefore discardable – may have fatal consequences. And that, at the end of the day, nobody can take over the responsibility for the unknown, sometimes unforeseeable consequences of an act which cannot be undone.

(クリストフ・ボード：ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン)

シンポジウム

はじめに

阿部 美春（立命館大学）

『フランケンシュタイン』誕生と出版二百周年にあたる2016年から2018年、日本シェリー研究センターでは、特別企画として、作品のミリュウに焦点をあてた講演とシンポジウムを持ってきた。企画をしめくくる今年、副タイトル「現代のプロメテウス」に着目し、時代のプロメテウス・カルトを横軸に、ヘシオドス、オウイディウス、アイスキュロスの系譜を縦軸に、『フランケンシュタイン』と、同時代の女性詩人のプロメテウス作品に描かれた「現代のプロメテウス」とは何かを検証する。

カランは、プロメテウスを「18～19世紀初頭ロマン派と革命支持者を魅了してやまない神話」と言ったが、芸術家たちは、プロメテウス神話のはらむ多様な可能性にインスピレーションを得て、新たな神話創造を試みた。ヘシオドスのプロメテウスは、その智略でゼウスを欺き、火という恩恵とパンドラという美しい禍をもたらし、プロメテウスが、実はエピメテウスに他ならないことを語る。この奸計の知者を、自ら選んだ運命に雄々しく耐える人類の英雄に生まれ変わらせたのは、アイスキュロスであった。わけでもロマン派詩人たちがモデルとしたのは、このプロメテウスであった。彼らは、運命に抗う自我の神話に、自らの似姿を見出し、ゲーテを嚆矢として、バイロン、シェリーは、プロメテウスに理想の自画像を重ねた。その一方でクルクシャンクやゴーチエは、ナポレオンの肥大化した自我を「現代のプロメテウス」に重ねて戯画として描いた。運命に抗って闘うプロメテウスの神話は、時代精神と共鳴し、フランクリンからナポレオンまで、新時代を切り拓く英雄は「新プロメテウス」の名で呼ばれた。こうしたプロメテウス・カルトに、メアリの「現代のプロメテウス」を置いてみると、重層的なプロメテウスの姿が浮かびあがってくる。

パネリスト廣野由美子氏は、「「現代のプロメテウス」とは何か？——『フランケンシュタイン』再読」というテーマで、ヘシオドス、アイスキュロス、オウイディウスの神話の原点に立ち返り、メアリの「現代のプロメテウス」の独自性と現代性を検証する。パネリスト阿部美春のテーマは、「苦悩するプロメテウスの後裔 —— ロマン派女性詩人のプロメテウス」である。ロマン派第二世代の女性詩人レティシア・エリザベス・ランドンのプロメテウスを、アイスキュロスの「苦悩するプロメテウス」に照らして検証し、プロメテウス・カルトのもうひとつの側面をみていきたい。

（あべ・みはる）

プロメテウス・カルトと『フランケンシュタイン』

司会・レスポンス アルヴィ 宮本 なほ子（東京大学）

「現代のプロメテウス」とは何か？——『フランケンシュタイン』再読

パネリストI 廣野 由美子（京都大学）

メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』には、「現代のプロメテウス」という副題が添えられている。本発表では、副題にこめられた作者のねらいは何か、という根本的な問題に立ち返って、作品を再読する。まず、ヘシオドス、アイスキュロス、オウイディウスの描いたプロメテウス神話と、『フランケンシュタイン』における「プロメテウス」のモチーフとを比較し、両者の重なり合う部分と差異とを確認する。特に差異に着目しながら、以下、主として3つの観点から『フランケンシュタイン』を読み直し、メアリ・シェリーの作り上げた「プロメテウス」像の独自性を浮かび上がらせる。

1) フランケンシュタインの人間創造： まず、世界の秘密を解き明かす好奇心が旺盛だった少年期、および、大学入学後、現代の科学を賛辞する教授の影響のもとで、未知の力を探求しようという熱意に駆られていた青年期初めのフランケンシュタインのなかに、「プロメテウス」的な精神を跡づける。しかし、人間の創造を目指して仕事に取りかかったフランケンシュタインは、名誉欲と、結果を出すことへの焦りに駆られ、人類を救済するという本来の「プロメテウス」的な目的から次第に遠ざかっていき、人造人間を完成させたあとは、完全にそれから乖離していることを指摘する。

2) 女の怪物の創造と破壊： ギリシャ神話のパンドラは、「最初の女」「災いのもと」とされる点で、聖書のなかのイブと共通している。『失樂園』を読んだ怪物は、自分にとってのイブが存在しないことに気づき、フランケンシュタインに女の怪物を造ることを要求する。フランケンシュタインは、いったん怪物の要求を受け入れて女の怪物の製作に取りかかったものの、人類に災厄をもたらすことを恐れて、それを破壊する。フランケンシュタインのこの行為のなかに「パンドラ」のストーリー、および「プロメテウス」のテーマとのつながりを探り、彼の意識を分析する。

3) 怪物の反逆： フランケンシュタインの物語には、ゼウスの存在との対峙という側面が欠落している。ゼウスの存在との対峙、すなわち、隷属を嫌い、精神の自由を求めて反抗するという試みを行ったのは、フランケンシュタインではなく、むしろ怪物である。怪物が、自分にとっての絶対神であるフランケンシュタインに対して、いかに徹底的な反逆を試みたかを、テキストを辿りながら検証する。

以上の考察により、『フランケンシュタイン』において「プロメテウス」的モチーフがさまざまな点でねじれていて、重層的なアイロニーを生み出していることを指摘する。それによって、プロメテウスを理想像とするロマン派の一般的解釈に疑問を投げかけるメアリ・シェリーのテーマの特異性を明らかにするとともに、彼女の提示する「現代のプロメテウス」の現代性を浮かび上がらせる。

(ひろの・ゆみこ)

苦悩するプロメテウスの後裔——ロマン派女性詩人のプロメテウス

パネストII 阿部 美春（立命館大学）

ロマン派の時代、運命に抗って闘うプロメテウスに理想の自画像を重ねたのは、男性詩人ではなかった。Wollstonecraftは、*A Vindication of the Rights of Woman* (1792)で、「理性という天上の火」を盗む自らをプロメテウスに準え、自叙伝的小説*Maria, or the Wrongs of Woman* (1798)では、夫という暴君に抗う妻をプロメテウスを想起させる姿で描き、女プロメテウスという新たな表象を生み出した。

一方、ロマン派第二世代の詩人Letitia Elizabeth Landon (L.E.L.)は、プロメテウス・モチーフをしばしば用いたが、ゼウス不在のプロメテウスの焦点は、反逆精神ではなく苦悩にあった。Landonが同時代の先輩詩人Felicia Hemansの作品について述べた、「苦しみは雄弁に調べを奏で、それが届くところに共鳴と応答を呼び覚まし、詩人への愛を生む」(“On the Character of Mrs. Hemans’s Writings” [1835])という一節は、Landonが苦しみ重要な価値を見出していたことを語っている。

ロマン派が祖型としたAeschylusをみるならば、そのプロメテウスを特徴づけるのは、反逆精神であると同時に、苦悩を通して生まれる共感であった。苦悩は、*Prometheus Bound*だけでなく*Agamemnon*でも、人間は苦悩を通して知を得るといふ大きな価値を与えられている。

Landonは、“Felicia Hemans” (1838)で、女性詩人の苦悩を禿鷲に身を苛まれるプロメテウスの苦悩に重ね、*silver fork novel*, *Ethel Churchill* (1837)では、登場人物たちが、悲嘆、愛情、嫉妬、憎悪、後悔という禿鷲に身を苛まれ、懊悩する姿を描いた。これらの作品に、Aeschylusの苦悩するプロメテウスがどのように継承されているのか、ポスト・ウルストンクラフト時代の女性詩人のプロメテウスを検証する。

(あべ・みはる)

立命館大学・衣笠キャンパス情報

《立命館大学・衣笠キャンパスまでのアクセス》

■JR・近鉄京都駅から

市バス 50 にて 42 分、市バス 205 にて 38 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

JR バスにて 30 分（京都駅からは、これがおすすめてです）「立命館大学前」下車

京都市営地下鉄で 13 分、「北大路」下車、市バス「金閣寺」行き 204, 205 にて 14 分、わら天神前」下車、徒歩 10 分 「わら天神前」から大学までの経路は、事前にご確認ください。

京都市営地下鉄で 13 分、「北大路」下車、タクシーで立命館大学（正門または東門）まで 10 分から 15 分 大会会場は、正門、東門に設置する案内表示、またはウェブ上のキャンパス案内をご覧ください。

(大学ホームページには掲載されていない情報です)

■JR 円町駅から

市バス快速 202/快速 205 にて 8 分、「立命館大学前（終点）」下車

市バス 15 にて 10 分、臨にて 9 分、「立命館大学前（終点）」下車

市バス 204/205 にて 5 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

JR バス 高尾・京北線にて 8 分、「立命館大学前」下車

■阪急電車西院駅から

市バス快速 202/快速 205 にて 15 分、臨にて 17 分、「立命館大学前（終点）」下車

市バス 205 にて 13 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

■京阪電車三条駅から

市バス 12 にて 53 分、市バス 15 にて 34 分、市バス 51 にて 36 分、「立命館大学前（終点）」下車

市バス 59 にて 40 分、「立命館大学前」下車

《学而館までのアクセス》

当日は、正門、東門、学而館前に案内表示を設置します。

■正門から 正門を抜けた後、最初の角を右へ、次の角を左へ直進し、広場に突き当たったら、右手の建物です。

■東門から 東門を抜けた後直進し、右手二つ目の建物になります。（至徳館、広場、その次が学而館です）

■南門から 南門を直進すると広場に出ます。広場の左にある建物です。

（学而館に近いですが、外部から来るとわかりにくい門です。タクシーの場合、この門に案内される時もあります）

《昼食などについて》

存心館食堂（営業時間：11:00～14:00）

志学館の購買部（営業時間：10:30～15:00）

正門近くにコンビニあり

《参照 URL》

立命館大学へのアクセス：<http://www.ritsumei.ac.jp/accessmap/kinugasa/>

立命館大学キャンパスマップ：<http://www.ritsumei.ac.jp/campusmap/kinugasa/>

《宿泊について》

事務局より先だってお送りした宿泊可能なホテルリストをご参照ください。

近年の宿泊先確保の難しさからも、お早めのご予約をお勧め致します。